

痛いのは嫌なので防御力に極振りしたいと思います。

書き下ろし短編小説



白峯理沙と一人見る夢。

BOFURI: I Don't Want to Get Hurt, so I'll Max Out My Defense.
SPECIAL SHORT NOVEL

著・夕蜜柑

Story: Yuumikan

ゲーム画面を理沙のキャラクターが駆ける。迎えた最終局面。優勝はもう目前にある。

「詰めるぞ！」

「オーケーオーケー」

「右にいます！ こっち回ってください。私は上から！」

「ああ頼む！」

短く言葉を交わし、それぞれが勝利に向かって最善の選択をする。

結果、数瞬後に理沙達の画面に大きく表示されたのは〈VICTORY〉の文字だった。

「ナイスー！ うおお……勝った！ よし！」

「GG！」

「よかったです。何とか……」

理沙もほっとしたように息を吐き、背もたれに体を預ける。

「ナイスコール！ いやー、全体通してかなり引っ張っていつてもらっちゃったなあ」

「いえ、こちらこそ。力を合わせて掴んだ勝利です」

「上手かった。マジで。冷静だし、ハンドスキルも……」

全員での練習を繰り返すうち、最終決定を下すのはいつしか理沙の役割になっていった。それが最も勝利に近い。

同じチームを組んだ二人も、理沙の持つ人並外れた才能を感じ取っていた。

「まだまだ伸びるだろうな。本当すげえ」

「はは、次も味方で頼む！」

「私もそうしたいです。何と言っても優勝チームですから」

優勝。初めて手にした形に残る結果は今まで以上に強烈に、理沙をゲームの世界へ引き込むこととなった。

理沙は思う。もっと。もっと、勝ちたい。全力を出しても届かないような、そんな誰かと遊んでみたい。激戦に次ぐ激戦。挑戦と全てを乗り越えた先の勝利は、あまりにも強い光となって幼い理沙を魅了した。自分にとっての「楽しい」は、ここにある。



そんな理沙がいつものように自分の部屋でゲームを遊んでいると、玄関のチャイムが鳴った。思ったより早かったと、理沙は椅子から立ち上がって階段を降り、玄関のドアを開ける。そこにいたのは楓だった。

本条楓。しばらく前に友達になってからというもの、よく理沙の家で遊んでいるのである。そういうわけで今日も今日とて楓は理沙の家にやってきたのだ。

「理沙ー！ 来たよー！」

「早かったね」

「荷物置いて急いで来ちゃった！」

「上がって上がって」

「はいー！」

来た道に戻って、理沙は楓を自分の部屋へと連れていく。

「今日も続きだね！」

「分かった。というか、そう言うと思って準備は終わらせてあるんだけど」

「おぉー！」

「どっちからやる？」

「まず理沙から！」

「ん、じゃあキリのいいところまで」

理沙はコントローラーを手取る。楓が声をかけたことから始まった不思議な関係は、理沙が最初に想定していたよりもずっと長く続いていた。

楓はゲームについて特別興味があったり、詳しくったりはしない。今日ここに至るまで、いくつものゲームを遊んできたものの、楓が元から知っていたゲームは一つもなかった。それでも、こういうわけか楓はいつも楽しそうであり、それはコントローラーを握っていようと、隣で見ているだけだろうと変わらない。

順調にゲームそのものが好きになっていってくれているのかもしれないと、理沙は少し嬉しくなる。

ネットの海へと漕ぎ出せば、顔も知らない誰かと遊ぶことはいくらでもある。いくつものパーティーと死線を潜り、ボスを倒し、他愛ない話をしたりした。ただ、同年代でこの距離感で一緒に楽しむことができる相手となると、全くいなかっただけでいい。

もっと沢山のゲームを遊んで、ゆくゆくは二人同じゲーム上で。

理沙の的確な判断により、最適な行動をとる画面内のキャラクターがボスを倒し、ストーリーをまた一つ前に進める。

「すごい！ すつごく強そうだったけど勝っちゃったね！」

「事前準備が上手くいったからね。対策アイテムが大事なんだー」

「なるほどー」

「じゃあ代わるっか」

「上手くできるかなあ」

「できるでさ」

今度は楓がコントローラーを持って、理沙と操作を交代する。理沙は基本的に楓のプレイを見守り、詰まった時に少しヒントを出す役割だ。

「……………」

ただ。思ったよりも随分スムーズに進むと、理沙は楓の操作を見て少し驚く。楓がゲームに初めて触れた日から、何度も理沙の家に来てゲームを遊んでいたこと。そして隣で手本としていた理沙のプレイがかなり上手いことが、楓の上達に繋がっているようだった。

今のところ遊んでいるのは、落ち着いて次の選択を考えることができるような、コマンド

制のRPGばかりではあるが、理沙には楓のゲームセンスは悪くないように思えた。

「こっちなあ？」

「いいね」

「ほんと!？」

「うん」

町で聞いた話と広げたマップから次の目的地を予想して、楓は順調に進んでいく。意識的にやっているかは分からないが、それは一見紐付いていないように思えるいくつかの情報を、自分の中で整理できている証拠だった。

そうしてしばらく探索したのち、楓は無事にボスまで辿り着く。

「強そう……」

「そうだね」

「理沙、手伝って!」

「いいよ。危なそうならアドバイスする」

「うん!」

まずは全体にバフをかけて、危なくなったら回復をかける。戦い方は先程見た理沙のものをそのまま真似たものだが、それは基本的な戦い方そのものであり、ボス戦は順調に進む。

「大技を準備してるから気をつけて」

「そうなの？」

「うん。楓は見逃しちゃってたんだけど文字が出たし、ボスの構えが変わったから」

「ほんとだ！」

理沙に言われてよく見れば、楓にもボスの変化は見てとることができた。

「ここは防御だね」

「ありがとー！」

理沙の助けを借りて、大技を的確に防御した楓はそのまま押し切ってボスを撃破する。

「倒した！」

「ナイスー！」

「理沙が教えてくれてよかったー……」

「アドバイスなしでも何とかなりそうだったけどね」

「えー、そうかなあ？」

「そこまで順調だったしね。ナイスプレイ」

「えへへ……」

上手くいったという経験はいいものだ。

元々楓にはゲームの経験がほとんどない。それでも、遊ぶためにこうして家まで来てくれているのだから、より楽しいと感じられるように理沙は気を使っていた。

しかしそれを抜きにしても、楓のプレイは理沙の想像以上のものだった。ボス戦に至るまでの道中でも感じていた、楓の持つゲームセンスについての理沙の認識は間違っていないかった。教わったこと、学んだこと、目にしたこと。理沙が隣で見せたものを辿るようにして、一つ一つ自分のものにしていく。

何の経験もないことがむしろ、楓の上達にプラスに働いていた。真っ白なキャンパスに理沙の見本。環境が味方した。楓は初心者でありながら、上達に向けた最短ルートを走っているのである。

もちろん初心者であることは事実で、応用や咄嗟とっさの判断はまだまだ難しいだろうが、いきなり躓つまずいてゲームそのものを楽しめなれないということにはならなそうだと、ようやく理沙は心安心する。

「今日はここまでかなあ」

「本当だ！ もうこんな時間！」

もう一つボスを倒すまでストーリーを進めるには時間が足りなそうだった。今日は楓に理沙の家で夜ご飯を食べていく予定がなかったため、そろそろ帰らなければならぬ時間なのだ。

と、そんなところで玄関のチャイムが鳴った。

「理沙のお母さん？」

「いや、多分……ちよつと待ってて！」

理沙は楓を残し部屋から出ていくと、少しして段ボール箱を一つ持って戻ってきた。

「ちよつど届いたみたい」

「何か買ったの？ 新しいゲーム？」

「ふふ、何でしょう……」

理沙は段ボール箱を開けていく。そうして中から出てきたのは輝くトロフィーだった。

「えー！ これどうしたの!？」

「ちょっと前にゲームの大会があつて、そこで勝つたんだ。その時のだよ」

「やっぱり理沙つてすごいんだねー……」

「チームの皆が上手かつたんだよ。私も活躍できたけど、本番の空気もあつて完璧にやれたとは言えないかな」

「チーム？」

「ん、ああー……楓はまだやったことないタイプのゲームだと思うんだけど、他の人と一緒に一つのゲームをするの。今やつてるみたいにコントローラーを交代で使うんじゃないかって、ゲーム機を一人一つ用意して全員で同時に遊ぶんだ」

「へえー……」

「今回は三人一組で他の人と戦う感じのやつ」

「ええっ！ 他の人と？」

「うん。相手も勝つためにすごい考えて動いてくるし、こうすれば勝ちやすいつていうのはあるけど思い通りにいかなかったり……でもそれが面白いんだ！」

理沙は楓にも分かるように目の前のゲームを例に挙げて説明する。ボスの行動パターンはある程度決まっている。だからこそ、楓は防御を固めることでボスを上手く撃破できた。

ただ、相手がより柔軟に考え、最適な行動を取ろうとするのであれば、勝つために求められることはより複雑に、難解になる。

「ねえねえ理沙、それってどんなゲームなの？」

「……！ ちょっと、見てみる？」